

私たちの知らない『野寄』 - 野寄との思い出と関わり 藤本圭子さん（五〇歳代）

著者	藤本 圭子, 野上 拓希, 甲南大学久保ゼミ, 久保はるか
雑誌名	「大学周辺地域の歴史を知る」シリーズ
巻	1
ページ	24-27
発行年	2017-05
URL	http://doi.org/10.14990/00002914

野寄との思い出と関わり

藤本圭子さん（五〇歳代）

—野寄地域での子ども頃の思い出について教えてください

子どもの頃は野寄の公園に行ったり、友達の家で遊んだり、また公園だけではなく当時は車の通りが少なかったので、家の前の道で男の子とは三角ベースボールをしたりとか、家の中でままごとをしていました。この上の山は登ることができたので、そこから山登りもしていました。この地域は畑や田んぼ、空地があり、道で遊んでいて車が来ても、ちよつとよけるだけでよかったので、自分の家の前や路地に入ったりと遊び場は多かったです。

小学校の頃は、私たちは「ていきゅう」って呼んでいる遊びをしました。自分の陣地の地面にワンバンさせて相手の陣地に入れるというルールで、大きなドッジボールを使用したボール遊びが小学校の頃によく流行っていました。他の地域では呼び方が違っていたようです。最大四人ぐらいで四角を書いて各陣地に順位を一番から四番まで決めて、勝っていったら順位が上がっていく。勝てば上がっていったら順位が上

下がっていく。最後は見物人になって、次に負けた人と見物人が交代する遊びを五年、六年の頃よくやっていました。位を元、大、中、小って決めている地域もあり、学校でこの遊びをよくしていました。

私が子どもの頃は住吉川で遊ばせませんでした。ちよつと小学校の頃埋め立てをしていたので、住吉川には入ってはいけないという時期でした。多くのダンプカーが通って（注：現在の遊歩道は当時ダンプ道だった）、山の土を海辺のほうに運んでいました（注：六甲アイランドの埋め立て）。なので、住吉川で遊んだ思い出は全くなく、私の子供を川で遊ばせることができた時に、自然の中でめだかを捕ったりしている姿を見てすぐうれしかったです。私が子供の時は川が身近に感じなかったもので、子供が川で遊んでいることは感動しました。



藤本さん 11月26日撮影

―阪神淡路大震災時の状況や、地域での活動について教えてください―

阪神淡路大震災の時に家が全壊してしまい、娘を亡くしました(注: 本山第二小学校では四人の児童が亡くなった)。その時は、娘が助かるように病院を求めて必死に車を走らせましたが、叶いませんでした。そのあと辛い気持ちを紛らわせようと、私は本山第二小学校でボランティアをさせていただきました。学校側との窓口や避難してきた方のフォローをしました。それが夏ごろまで続きました。六月頃までは毎日

学校に行っていました。夏休み明けからは子供たちに教育の場を返そうということになり、避難所は少しずつ小さくなっていきました。二学期からはほぼ全部明け渡しました。その頃、自分の店(寺田商店)も少しずつ復旧してきたので、店を開けました。その当時、福祉センターは避難所として指定されてなかったと思います。阪神淡路大震災があつてから、福祉センターの大切さを実感し、福祉センターができたように思います。福祉センターにはだんじりの時や会合があるときなどに顔を出しています。

―だんじりとかかわりについて教えてください―

子どもの頃、野寄にはだんじりがなかったのですが、岡本の地域にはだんじりがあったので、そっちについていく、寄せてもらうような感じで祭りに参加していました。野寄にだんじりが来たのは私が子供を持つてからでした。私の子供はだんじりが大好きで、鳴り物をさせてもらったりしています。私は、私の子供が小学校一年生の時に、まかないとしても参加するようになり、毎年五月の三、四、五日と参加しています。だんだん私たちも年を重ねてきているので、若い人たちに参加してもらえればと思います。

―地域住民とかかわりについて教えてください―

私は、学校開放の委員として本山第二小学校と関わらせてもらっているのですが、PTAの方や役員の方とはコミュニケーションをとれていると思います。本山第二小学校をお借りして、青少年育成協議会の人たちが子どもたちにむけてファミリー運動会を開いた時には、私は子育てコミュニティという団体として青少協のお手伝いをしました。豚汁の炊き出しをして皆さんに食べてもらっています。また、二月には学校開放として餅つき大会をしています。そのような活動を通して、子どもたちや保護者の方と少しはコミュニケーションをとれているのかなと思います。

現在、この地区はだんじりなども活発に活動していて、様々な方とコミュニケーションをとる機会があると思います。私の子供も幼い頃からだんじりに参加し、友達とだんじりを曳いていますし、それによって保護者同士もコミュニケーションをとれると思います。地域の祭りや触れ合いがあることで、私の子供が地域の人に声をかけてもらえるということはとてもありがたいです。もともと私が生まれた時から野寄は温かい町で、みんなが見守ってくれる温かな

「村的な」所のようで、おばちゃんやおじちゃんが「○○ちゃん、どこいくん？」といったように声をかけてくれる。そういうものが野寄には残ったまま、そういう意味でいい形の「村的な」地域だと思えますし、その核となるのが祭りなのかもしれません。

―野寄から西岡本に地名が変わった時はどう思われましたか?―

「野寄」から「西岡本」に地名が変わったのは、私が高校生か大学生の時だったと思います。地名が変わる前、中学校や高校の頃は住所を言うのが恥ずかしかったです。普通はだいたい「○○町○丁目:」だと思います。でも私の住所は「本山町野寄字仏天垣」でした。中学校に入学して、この住所を言うと、違う地域に住んでいた友達に「これどこ?」って言われました。小学校までは全員ほとんど同じ住所で、他には「仏天垣」ではなく「高井」「手崎」といった住所の人もいたので、住所が変わったと思ってなかったです。でも、中学の友達に「自分も漢字ばかりやん」と思っていたので、変わった住所って言われるのがすごくショックで、それが恥ずかしいと思った記憶があります。だから地名が変わった時、野寄っていう名前がなくなるこ

とはショックでした。しかし、それと同時に私たちもやっと「○○町○○丁目」っていう住所になったっていう、うれしい気持ちもありました。ただ、「西岡本」っていう名前は客観的に場所がわかりやすくていいが、私は「野寄○○丁目：」でもよかったのではないかと思います。

—野寄のいいところは何ですか？

野寄のいいところは、やっぱり子供たちを自然と見守ることができるところ、だんじりや七夕祭りにはたくさんの子どもが集まり参加するの顔が覚えることができて、少しずつ親しくなっていく話ができるといったように、町ぐるみ村ぐるみでみんなが見守っていけるところが素敵だと思います。

取材日 二〇一六年 一月二六日

編集 野上拓希



「震災18年 震災のつどい」 遺族代表 藤本圭子さん 平成25年 1月17日